

ディアスポラの軌跡～ハンセン病家族訴訟～

研究年度 平成 31 年度

研究期間 平成 31 年度～平成 31 年度

研究代表者名 井上佳子

共同研究者名 なし

・はじめに

もともとギリシャ語で、土地を追われ続けるユダヤ人を意味する「ディアスポラ」。ディアスポラからは、世界の矛盾だけでなく、抑圧される側の逞しさやしたたかさ、強さなど人間そのものの姿も見えてくる。

本稿では、このディアスポラを「抗えない大きな力によって故郷を追われ、人生の変更を余儀なくされた人たち」と広義に捉え、ハンセン病元患者やその家族を考察することにした。ハンセン病元患者の家族については「負の側面」が強調されがちだが、「ハンセン病元患者の家族であること」は果たして、それにとどまるのか。ハンセン病元患者の家族が、差別に苦しみ、自分の差別性と葛藤し、自分と正面から向きあう中での「回復」的側面を考察することは、人間の可能性に大きく関わるテーマだと考える。2016 年 2 月に提起されたハンセン病家族訴訟の原告団長、林力のこれまでの軌跡を通して考察する。

・研究内容

ハンセン病元患者に対する、長年にわたる強制隔離政策によって、元患者の家族も大きな被害を受けたとして、2016 年 2 月に熊本地裁に提起された国家賠償請求訴訟は、2019 年 6 月、原告勝訴の判決が出され、その後、政府が控訴しない方針を決定したことによって、勝訴が確定した。原告は 561 人。親やきょうだいがハンセン病だったことで差別を受けたり、またそのことで親に対して愛情を持つことができず自然な親子関係を築くことができなかったことを心の傷として抱える人が多い。いまだに厳然としてあるハンセン病への差別から、原告のうち、顔や名前を出して被害を訴える人はごくわずかだ。原告団長の林力（はやしちから）は、強制隔離政策を定めた「らい予防法」が存在する時代から、ハンセン病を父に持つことを著書の中で告白し、国家による強制隔離政策によって元患者やその家族がいかにか不当な差別を受けてきたかを訴え続けてきた。その一方で、教育の場にいた林は、同和教育に積極的に取り組み、被差別部落の人たちの人権を向上させる運動に力を尽くしてきた。本稿では、林が歩いたこれまでの人生に「ハンセン病元患者の家族

であること」がどう関わっているのか、林とのインタビューや林の著作をもとに検証したい。

・研究成果

現在 95 歳の林力は、父親がハンセン病であったことで、幼い頃から差別にあい、また、父親が療養所に隔離されたことで貧困の中で成長した。林はずっと父親のことをひた隠しにしてきた。教師になった林は同和教育に没頭する。その背景には、同じ「差別」の中を生きるものとして、差別への怒り、そして被差別者への共感があった。やがて林の中に、抑圧されても強く生きる人たちに対する尊敬の念が生まれていく。そして、親がハンセン病であったことを社会に告白し、単身、差別する社会を問う活動を始めるのである。林の思考は、教育の本質を問い、更に差別や偏見を放置してきた社会を問う活動に広がっていく。林の多くの著作をもとに、彼の人生の軌跡を追い、ハンセン病の家族であることが、彼の人生をどう決定づけたのか、つぶさに追うことができた。

林の長女、美知子は、家族訴訟の原告団長である父を精力的に支えてきた。2015 年には、「一般社団法人ヒューマンライツふくおか」を立ち上げハンセン病を語り継ぐ活動を行っている。ハンセン病家族訴訟の原告の中には、親がハンセン病であったことから、いじめや差別、貧困に見舞われ、長年、親に対し「恨み」にも似た複雑な感情を抱いてきた人も多い。しかし裁判を通し、当時親が置かれていた境遇や、その思いを推しはかる中で、次第に親への思いは変化している。2016 年に提起された家族訴訟は、子や孫らがこれまでの自分の人生の空白を埋める作業なのである。父の死後、1970 年代からハンセン病患者を親に持つことを公表して活動してきた林にとっては、その長きに渡る世間への問いかけ、自問自答が、父との距離を埋め、関係を再構築する作業だったのだろう。そしてそれは林自身が生きていくために不可欠な営為だったに違いない。

ハンセン病回復者を家族に持つ彼らから見えてくるものは、苦難を自分自身の幸せ、喜びに変える力である。それはその大きな課題に正面から向き合った者だけが得られるものではないだろうか。

・おわりに

ハンセン病患者の家族たちは、いまだに消えない差別や偏見の中、多大な苦勞をしてきた。しかし彼らと話をしていると、「負の側面」とは別に、人間の逞しさや強さやさしさのようなものも見えてくる。「ハンセン病患者の家族であること」は、間違いなく、ポジティブに彼らの考え方や人生観を決定づけていた。

筆者は以前、明治期、三池炭鉱に集団で移住した与論島出身者を調査したことがあるが、

このときも、境遇をポジティブに受け止め乗り越える人間の姿を目の当たりにした。マスメディアでは、彼らディアスポラの「負の側面」を強調しがちであるが、このような「人間が本来持つ力」について知ることも大切ではないかと思う。ディアスポラを「抗えない大きな力によって故郷を追われ、人生の変更を余儀なくされた人たち」とするならば、水俣病への偏見で故郷を離れた人もいるし、東日本大震災の原子力発電所の事故で福島を出ざるを得なかった人たちもいる。効率を追求してやまない世界で、いつ誰が、ディアスポラになるかわからない世の中であるならばなおさらのことである。

・参考文献

- 1 林力『解放を問われ続けて』、明治図書出版、1974
- 2 林力『若き教師たちへ』、解放出版社、1988
- 3 林力『父からの手紙』、草風館、1997
- 4 林力『山中捨五郎記 宿業をこえて』、皓星社、2004
- 5 林力『父はハンセン病患者だった』、解放出版社、2016